教育総合センターだより

NO.１６５

令和　４．９．１

「ターニングポイント」

尼崎市立武庫東小学校
校　長　　柳　一　光

校長として、コロナ禍での二年半の学校運営。十年一昔とは言いますが、実感としては一年一昔のようなスピード感で子ども達や保護者、教職員を取り巻く教育環境は激変してきました。

まず大きな変化は、教育環境のタブレット活用が急速に進んだことです。尼崎市版 GIGA スクール構想による教育委員会の主導のもと、現場は試行錯誤を繰り返しながらも積極的に ICT を活用し、学校閉鎖期間においてもオンラインで最低限の学習が保証できました。今では、1 年生の児童も学習活動の中にタブレットの活用を取り入れるようになっています。

教育委員会のリーダーシップもありますが、やはり現場の教職員が短期間で ICT 環境やタブレット操作等を自主的に学び、子ども達のために、前向きに取り組んだ結果だと考えます。管理職として、教職員の努力を目の当たりにすると、その姿は心強く尊敬に値するものでした。

次の変革は学校行事です。以前にも学校行事の精選については、様々な議論がありましたが、今回のコロナ禍においては、各学校である意味習慣化していた行事を、本来の目的や必要性について焦点化して見直しが図れたように思います。

例えば、体育大会はコロナだけではなく熱中症リスクも考慮した上で、本当に午前午後の 1 日必要なのか、卒業式を 1 時間程度にする場合に、絶対に必要なものは何か等の共通認識です。コロナが収束しても、以前のように例年通りではなく、コロナ禍で再検討された学校行事に対する考え方は、残っていくことでしょう。

コロナ禍で教育活動が中止になったり、制限されたりする中で、私自身再確認できたことがあります。それは、人との関わり、コミュニケーションこそが、子ども達の成長にとってあるいは教育にとって不易な要素であり、不可欠だということです。仕方のないこととはいえ、コロナ禍で給食が黙食になり、マスク着用で相手の表情がわかりにくくなり、学習活動もグループ学習が制限される中での学びは、感情の動きが少なく、淡々として活気がない印象でした。

「教育は人格の完成」を目指すものですが、クラスや学年、異学年の子ども達同士の関わり、また教職員や保護者を含めた地域の人との関わりの中で、子ども達は楽しんだり、悩んだりしながら人として成長していくものです。

私は、今現在の学校現場が大きな変化の渦中にあることを実感しながらも、不易と流行を見極めつつ、教職員とともに変革期の子ども達の教育に携われることに大きな喜びを感じています。

☆☆～尼崎市１年目教員必修研修より～☆☆

尼崎市では、中核市として１年目教員必修研修を市独自で実施しています。初任者の先生方に伸ばしていただきたい資質・能力を考え、年間計画を立てています。また、年度初めには「接遇」や「アレルギー疾患への対応」についての研修を、学期末には「学習評価」についての研修を行うなど、１年間の学校での教育活動とリンクした時期に研修を実施することで、よりよく効果を上げていくこともねらいとしています。

ここでは、今年度実施した２つの研修とその様子、受講者の感想を紹介します。

【6.28 実施　尼崎市１年目教員必修研修第４回】

大阪教育大学大学院連合教職実践研究科　准教授　庭山　和貴　氏を講師に迎え、「子どもの『やった！』『できた！』を増やすポジティブ行動支援」についての研修を行いました。

「望ましい行動」と「困った行動」は同時に行うことができず、困った行動への事後的対応だけでなく「望ましい行動を増やすアプローチ」を行っていく考え方について学びました。

【受講者の感想】

○子どものよくない行動ばかりに目が行きネガティブな指導を多くしていたことに気づきました。これからは、頑張っている子どもに目を向けて、ポジティブなフィードバックができたらいいと思いました。

○ダメだと言われるより具体的な行動を価値づけられた方がやる気も出るし、問題行動をすぐに直させてできた時点ですぐ褒めることが大切だなと思いました。

【7.5 実施　尼崎市１年目教員必修研修第５回】

１年目教員必修研修では、教科についての研修も行われ、各教科の授業づくりについて学び、授業力向上に取り組んでいます。

第５回では、四天王寺大学　教授　杉中　康平氏を講師に迎え、「『考え、議論する』道徳科の推進～『主体的・対話的で深い学び』につなげる道徳の授業～」というテーマで、「特別の教科　道徳」の指導について学びました。

「特別の教科　道徳」の授業像から、教材の特徴、発問づくりなど、授業づくりにおいて大切なことを受講者と一緒に、考えを引き出しながら、授業形式で研修が行われました。

【受講者の感想】

○道徳の発問を精選するのを今後意識しようと思いました。楽しく学べました。

○道徳の授業の仕方がイメージしにくかったが、道徳の構造や発問の仕方などを知ることができて次回からの授業に活かしていきたいと思った。

○before、after、振り返り、この三つの発問を中心に道徳をすることで、余計な発問をなくせるということに驚きました。明日からの授業に活かしていこうと思います。

【おわりに】

１年目教員必修研修では、これからも国や社会の動向そして本市の教育課題にアンテナを張りながら研修内容を精選していき、工夫・改善を行ってまいります。　　（研修担当：吉向　良太）

☆☆本市の教育相談・不登校支援の取組について☆☆
～専門家とともにアセスメントを行い適切な支援ニーズを把握しよう～

【本市不登校の状況】

コロナウイルス感染症による社会不安が続く中、全国的にも不登校児童・生徒数は増加傾向にあります。本市におきましても、例にもれず、小学校 351 人中学校 676 人合わせて 1027 人と 1000 人を超える状況にあり、さらなる支援を必要としている状態となっています。

【不登校の要因】

不登校という現象は、こども本人特有の要因・学校環境の要因・家庭環境の要因・社会環境の要因など様々な要因が複合的に重なり合って表出しております。この要因を丁寧に把握し、個々のニーズに応じた適切な支援方法を考えなければなりません。それには、教師の視点だけでなく、カウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった専門家の視点を取り入れた『アセスメント』が重要となります。

【教育相談体制の充実】

多様な社会的な背景により課題を抱える児童生徒に対する教育相談を充実していくために、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）の配置を進めています。教員とは異なる専門性や経験を有する専門的なスタッフとともに専門性を発揮しながら、課題解決を目指していきます。

ＳＣ（スクールカウンセラー）

心理に関する高度な専門的知見を有する者として、児童生徒、保護者に対してのカウンセリング、教職員への助言・援助（ｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ）、情報収集、見立て（ｱｾｽﾒﾝﾄ）等を行います。

ＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）

児童生徒のニーズを福祉の専門家として把握し、関係機関との連携を通じた支援を展開するとともに、保護者への支援、学校への働きかけを行います。

ＳＣとＳＳＷは、「悩んでいる子どもの力になる」という点では共通していますが、ＳＣの役割は、悩んでいる子どもの心のケアをすること、ＳＳＷの役割は悩んでいる子どもの福祉面を整えるサポートをすることと役割に違いがあります。役割の違いを意識した連携が大事です。

【ほっとすてっぷ　教育支援室】

市内３か所に設置。（ＥＡＳＴ定員 40 名　ＷＥＳＴ定員 20 名　ＳＯＵＴＨ定員 20 名）不登校児童生徒に対して個別の相談、集団での指導、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善等のための指導や援助を行っています。

【サテライト教室　学習支援室】

市内８か所に設置。（定員はなし）不登校児童生徒の身近な居場所、学習の場として、地域の生涯学習プラザ等を活用して、こども自立支援員が学習支援を行っています。

ほっとすてっぷ、サテライトでは、個別の状態･状況に応じた支援に取り組んでいます。学校ともより一層の連携を図りたいと思っていますので、ぜひ、ご訪問ください。

本課では来年度に向けて、現在、不登校児童生徒への支援に向けた学校用リーフレットを作成しております。完成の際にはご活用をお願いいたします。

（こども教育支援課　課長　福田　晃大）

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

（３Ｆ　教育情報コーナー）

【新着図書】

・『はじめてのＬＧＢＴ入門』　清水　展人　著／主婦の友社
・『図解でわかる14歳からのＬＧＢＴＱ＋』　社会応援ネットワーク　著／太田出版
・『子ども介護者　ヤングケアラ―の現実と社会の壁』　濱島　淑惠　著／KADOKAWA
・『個別最適な学びの足場を組む。』　奈須　正裕　著／教育開発研究所
・『先生、どうか皆の前でほめないで下さい』　金間　大介　著／東洋経済新報社
・『情報教育と学校図書館が結びつくために』　今井　福司　編著／悠光堂
・『学校図書館　ここはいつでもぼくの場所』　横山　寿美代　監修／少年写真新聞社
・『校長の覚悟』　『教職研修』編集部　著／教育開発研究所
・『生活・総合　資質・能力の育成と学習評価』　田村　学　編著／東洋館出版社

（担当　松浦）

☆「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

【本の紹介】

■『一斉休校そのとき教育委員会・学校はどう動いたか？』（明石書店　2022年3月初版発行）

編著者　末富　芳：日本大学文理学部教育学科教授。京都大学教育学部・同大学教育学研究科修了。専門は教育行政学、教育財政学。主な著作に『教育費の政治経済学』『子どもの貧困対策と教育支援』他

2020年2月27日の当時の安倍総理の全国一斉休校要請から、2020年4月の緊急事態宣言による休校期間延長を経て、6月半ばまでに順次休校解除をしていくプロセスに焦点を当て、教育委員会がいつ誰とどのように休校開始を判断し、学校や児童生徒・保護者にどのように対応したかを、協力自治体の教育長へのインタビュー、教育委員会アンケートで明らかにしている。その中には、当時の尼崎市、松本教育長のインタビューや尼崎市の状況・取組についても紹介されている。

あれから2年以上経過した現在においても、次々に変異するウイルスに翻弄され、様々な対応を余儀なくされている学校現場や教育委員会にとって、その原点ともいえる時点での各自治体の苦闘を知ることは、危機管理の意味でも重要なのではないか。

■『図解でわかる14歳からのＬＧＢＴＱ＋』　社会応援ネットワーク著／太田出版

著者　社会応援ネットワーク：全国の小中学校向けの新聞『子ども応援便り』編集室が、2011年東日本大震災後に被災地の子どもたちを励まそうと、著名人から集めた「メッセージ号外」を発行したことをきっかけに設立。以降、心のケアや防災教育、パラスポーツなどの教材・動画作成や出前授業のコーディネートなど、教育現場のニーズに応えた支援活動を行う。

見開き完結型のＱ＆Ａ方式で構成されている。ＬＧＢＴＱ+に関するテーマには様々なものがあり、複雑に絡み合っているが、日常生活に根差した素朴な疑問をもとに4つのパート、32の質問に整理され、自分自身のことから地球社会へと理解を広げることができる。読みやすく理解しやすい1冊である。

※教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。　（担当　西川）